Tsukuba Psychological Research
1988, 10, 175-181

内的体験からみたスチューデント・アパシーの特性に関する一考察

筑波大学大学院（博）心理学研究科　正保　春彦

筑波大学心理学系　台　　利夫

A study of characteristics of student apathy from the standpoint of inner experience

Haruhiko Shobo and Toshio Utena (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Ibaraki 305, Japan*)

In resent years, many researches on student apathy from the standpoint of psychiatry have been reported, but few have focused upon the consciousness and experience of apathy students. Four groups of students (normal group, client group, masked-client group, and post-client group) were investigated by TAT, Identity Status Interview and autobiography. Scrutiny of typical subjects of earch group indicated that about half students of the client group and the masked-client group had peculiar viewpoints about their lonely situation in their inner world of experience. It is considered that this characteristic was closely related to their inquiry into self-existence, which underlied the subjective apathy atate of the students. In addition, it is also suggested that expression of their inner world and mental contact between apathy students and an interviewer are facilitated if we utilize a frame such as TAT.

Key words : student apathy, inner experience, TAT, peculiar viewpoint.

スチューデント・アパシーという言葉は，通常，無気力な大学生が示す症状について用いられている．これは現在一つの疾患単位として広く認められているわけではなく，具体的にどのような症状を指すのか，という点についても一致した見解はないが，青年期における一つの心的な障害の形態として見た場合に，いくつかの興味深い特徴がある．

第一に，少なくとも表面的には，注目に値するような人格障害が認められないこと．第二に，多くの場合，優秀な経歴を持つ真面目な学生に見られること．第三に，立ち直った学生が，自分が過去にスチューデント・アパシーになったことについて積極的意義を見いだすことが多いこと，などである．

そもそも，このスチューデント・アパシーを最初に提唱したのは，Walters, P.A. (1961) であるが，わが国でも丸井（1968）や笠原（1971）以下多くの研究がある．これらの諸研究には主として精神医学的見地からのものと心理学的見地からのものがあるが，精神医学的見地からの研究はその現象的側面の記述については詳細であるが，彼らの置かれたアパシー状況の中核的部分についてはあまり述べられていない．これに対して，心理学的見地からの研究は自我同一性の危機という観点からのものが多く，スチューデント・アパシーそのものについての研究は非常に少ない．

このような中で，近年，スチューデント・アパシーという名前に代わって，アパシー・シンドロームという名称がしばしば使われるようになってきたが（Farnsworth, 1973., 笠原・成田，1979. など），その背景には，本来，大学生対象の cumpus psychiatry においてみられたアパシー反応が，高校生から三十歳代のサラリーマンにまで見られるようになったと

いう事実がある．またそこで笠原は，退却状態について，本業的生活部分からの退却を中心とする選択的退却をその特徴とした上で，その臨床的諸特徴を主観的な無気力と客観的な退却行動など数項目をまとめているが，嶋崎・竹内（1981）や山田（1984）は退却状態そのものを二つに分けることを提案しており，一概に述べることはできないようである．

このように見てくると，スチューデント・アパシーについての最大公約数的な特徴は，とにもかくにも主観的な無気力と言うことに尽きると言える．しかし，様々な症例をみてみると，多くの場合主観的な無気力と言っても単にそれのみではなく，「自分とは何か」「自分らしいものがほしい」という実存的な悩みがその根底にあることがうかがわれる．すなわち自らの個としての独自性にかかわる問いかけが主観的な無気力の背景にうかがわれるのである．このように，スチューデント・アパシーの中核にある悩みは，自己の存在証明を中心としたすぐれて意識的・体験的な悩みであるが，このような意識的・体験的側面に焦点をあてて行った研究は少ない．

以上を要するに，精神医学における症状の記述・分類的研究はアパシー・シンドロームを捉えるための軸の構成という点からも重要であると思われるが，精神医学の分野における従来の記述・分類的研究がいまだにこの症状の概要を捉え得ないでいるのは，学生たちの問題がより心理・社会的次元に属しており，Ackerman, N, W (1958) も指摘するように，成人中心の伝統的精神医学的分類が，若者の発達現象として生じる流動的病像に適用しがたいからではないだろうか．また，自我の心理学的研究も確かに一つの照明を与えはするが，これらは正常者の同一性達成の研究が中心であり，方法論的にも実証性・客観性が重んじられるあまり，意識的な悩みに特徴づけられるスチューデント・アパシーの中核的な問題を捉えるには，尚，不充分であると思われる．

スチューデント・アパシーは特定の現象形式を明確には同定しがたい．しかしながら，スチューデント・アパシーの本質が自分だけのものを求めて求め得ないという心的状態にあるならば，そのオリジナルな特徴は現象形式を異にしながら，特定の内的体験世界を担って現れているのではないかと考えられる．そして，そのような内的体験世界に直接にアプローチし，その具体的様相を了解可能なかたちで取り出すことにより，スチューデント・アパシーに対する新たな接近のための手がかりを得ることもできるのではないだろうか．

以上の問題提起に基き，本研究では，アパシー学生の内的体験世界を通じてスチューデント・アパシーの本質的部分を探ることを目的とした．

方法と対象

(1)　予備調査　本研究は主として筑波大学及び某私立大学学生相談室に来談している学生を対象として行われたが，アパシー学生の多くは自発的に来談しないことが多いため，一般学生の中にも類似した特徴をもった学生がいると推定し，筑波大学生337名（男子191名，女子146名）にスクリーニング・テスト（注１）を行い，その中からアパシー傾向の強い学生５名を抽出した．また，アパシー学生の予後を調べるため，昭和56～60年に筑波大学学生相談室に来談していた学生の一部（既卒者14名，在学生１名）に郵送でアンケートを行った．

(2)　対象

①N（Normal）群　スクリーニング・テストを受けた学生のうち，特にアパシー傾向の見られなかった学生５名．

②Cl（Client）群　学生相談室に来談している学生５名（いずれもスチューデント・アパシーと診断されている）．

③M-Cl（Masked-Client）群　スクリーニング・テストを受けた学生のうち，特にアパシー傾向が強いと判定された学生５名（平均点から2SD以上得点が高かった者13名のうち協力の得られた者）．

④P-Cl（Post-Client）群　郵送アンケートの回答の得られた学生１名．在学生であったため，他の学生と同様のすべての手続きをとることができた（本群の対象者のほとんどは既卒者であったため接触は非常に困難であった）．

(3)　手続き

面接　無藤（1979）による自我同一性地位面接（注２）を行い，面接の内容を筆記記録した（但し政治の項目は除く）．地位面接終了後，生活史及び最近の日常生活等について質問し，報告を受けた．

ＴＡＴ　被検者となった学生の内的体験世界を探るために早大版絵画統覚検査を行った．使用図版は，練習，１～８，11，15の計11枚であった．また結果の分析は，山本（1965）のかかわり分析法によった．

自叙伝　各群の一部の被検者に，星野（1983）の方法に従って自叙伝を執筆してもらった．執筆の際には，執筆のポイントをまとめた手引きを渡し，それに従って二千字程度にまとめてもらった．

＊調査は昭和60年７月～12月にかけて行われた．また62年７～９月にかけて，本研究において被検者となった学生に追跡調査を行い，現状を把握した．

結果と考察

(1) 典型例について

各被検者の特徴は様々に異なっていたが，以下，各群に現れていた特徴が最もよく現れている被検者を典型例として挙げ，その例について詳述することにする．

N群では地位面接で早期完了と評定され，ＴＡＴで最も自由で自然なかかわりが示されたＨＩを典型例として選んだ．

Cl群とM-Cl群は，地位面接で若干の違いが認められたが，ＴＡＴおよびその他の諸特徴ではほぼ類似した傾向が示されたため，あえて両群を区別する必要はないと考えられた．両群のＴＡＴには全般的に抑圧的傾向が見られたが，特に約半数の被検者において孤独な状況に対する一種独特な見方が特徴的であった．そこで，ここでは，この状況に対する一種独特な見方を手がかりとして，その傾向が特に強く現れていたMKとＮＨを典型例としてとりあげることにする．

P-Cl群はＩＴ一例なので，便宜上ＩＴを代表として示す．

□N群　ＨＩ　3年生　女子

◎地位面接

[同一性地位] 早期完了

[将来の職業]看護婦になるつもりだったが，母のすすめで心理臨床関係の仕事にすることにした．生産的な職業ならこだわらない．

[価値観]人間らしさを失いたくないということ．将来も変えないだろう

◎ＴＡＴ要約

図版１．おうちではあんまり勉強できないので，みんなが帰った後に一人だけ残って勉強している．暗くなって字が見えなくなる頃に帰るだろう．おうちの人には内緒にして意気揚々と帰っていく．

図版８．年末で今年来た手紙をお父さんが燃やしている．今年も終わりになるんだなあと年の行くのを惜しんで，燃やし終ったら，家の中へ入ってお茶を飲みながら奥さんと話す．

図版15．夕食の団らん．奥さんとだんなさんと子供がいて，今日あったことを晩酌しながらほのぼのと話をして．で，だんなさんはお風呂はいっちゃって，お母さんは子供と話をしながら後かたづけをするだろう．

◎自叙伝要約

両親が共働きで，あまり甘えた記憶はない．姉としていい子らしく振舞おうとしていた．中２で転校したときに親切にされ，以前の自分を反省し，人の面倒を見るようになった．この頃が一つの転換期で，自分を抑えて人とつきあえるようになったり，生徒会に立候補したりした．高校時代はつらいことが多かったが，精神的に強くなれた．知人の死により「死」や「命」について真剣に考えた．今の大学を選んだのは両親の意見を取り入れたと言え，かなり親の価値観に左右されていたと言える．そのため大学入学後は「しっかりしなくちゃ」と気負い，疲れてしまった．ゆとりを持つようにして，気負いもとれて自然に過ごせるようになった．今が最も自分らしく振舞えている時だ．

[まとめ]

地位面接では，職業・価値観共に，今までに危機に陥ることなく過ごしてきている．しばしば早期完了地位の問題とされるrigidityはあまり見られない．ＴＡＴでは，基本的にＨＩは図版の中で自由でのびのびと活動している．彼女をとりまく状況は開放的である．図版１に見られるような充実感・自信や，図版15に見られるような温かい家庭的な雰囲気に対する傾倒が特徴的といえる．このような特徴は多少の違いはあるが，その他の被検者でも類似しており，一部の例を除いて，自然な実感の流れにおける自由なかかわりという傾向は変わらない．しかし，戸川(1953)はＴＡＴ物語を図版の刺激特性，物語的特性，それに語り手自身の特性の３つの極からなる三角形の内に位置づけているが，戸川の見方によれば，N郡のＴＡＴ物語は図版の刺激特性をうまく取り込みつつ，かつそれに物語的な要素もうまく調和しているのであるが，物語の中に語り手自身に属する部分が少ない「投影の動機のない」物語だということができる．言い替えれば，彼らには各刺激図版を前にして一貫して語らねばならないような個人的問題が少ないとも言える．故に，このような投影の動機のなさがN群のＴＡＴ特徴であると言えるかと思われる．ＨＩの自叙伝においては，幼児期から大学生に至るまで，各発達段階でそれなりの問題に直面し，順次その問題を乗り越えてきていることが注目される．

□Cl群　ＭＫ　3年生　女子

◎地位面接

[同一性地位] モラトリアム

[将来の職業] お先真っ暗．企業，エリート・コースはいや．生甲斐のあることに打ち込みたい．

[価値観]常に生きて行こうとする意志が大事．以前は両親に反発していたが，今は客観的．

◎ＴＡＴ要約

練習図版．かごめかごめをしていて後ろの正面だあれにさしかかるところ．女の子は後ろに誰が来るかなと考えている．自分の好きな子の名前を言うが，当たったか当たらなかったかは分からない．女の子は自分の呼んだ名前の男の子と手をつないで帰りました．

図版８．何かに絶望している．自虐的．死のうとして木に紐をつるした．慕っていた女が分れの手紙をよこしてきた．大変悲しい思い．過去の手紙・日記帳とか燃えてしまえばいいと思って燃やしている．木のそばへ行くが，死ぬのも滑稽なのでふらっと出て行く．

図版15．女がろうそくに火を灯している．女は社会性がなく，弟にとって重荷．だがろうそくに象徴されるような灯りを心の中に持っていた．弟は姉を背負って行くことができず，自分の人生を生きるが，出会う人々の中に姉の持っている心の火のようなものを見ることによって生きている．

◎自叙伝要約

小学校時代は活発だったが，協調性に欠けていたため仲間はずれに．反省して自分を変えようと努力したが元の様にはなれなかった．中学校時代は楽しかったが，何事も持続できずボーッとして過ごしていた．姉が登校拒否になったが両親が責任をなすりあい，その頃から将来に対する希望を失った．高校時代もボーッと過ごした．大学に入ってカルチャー・ショックを受け，入学後３カ月で自分が分からなくなり，大学へは行かず気の向くままに過ごした．このままではいけないと思い，３年次に休学．実社会で働くことで自分の矛盾が見えてきた．そして自分から逃げていては何も解決しないと思い復学．今，初めて過去と現在がつながり，自分が何者かがわかるようになり，あるがままの自分を認識できるようになった．今後は視野を広げることが課題．

ＮＨ　３年生　男子

◎地位面接

[同一性地位] 同一性拡散（副評定：モラトリアム）

[将来の職業]分からない．組織に組み込まれるのはいや．そうでないのを探している．

[価値観] ない．

◎ＴＡＴ要約

図版１．小学校の理科教室．以前には大勢の小学生でにぎやかだった．今は日暮れ時．この少年は日頃から一人でぼんやりしているのが好きで，この日は誰もいなくなった後の校舎の雰囲気が気に入って，校内を歩き回っているうちにここへ来た．棚の中に変わった装置を見つけてそれをいじっているところ．夢中になって家に帰るのを忘れている．暗くなるまでそうして家に帰る．

図版６．都内の外れの工芸学校のアトリエ．少女は平凡な育ち．将来に向けて自分の好きなことにかけてみたい．石膏像をぼんやりと見ている．黙々と作業を続け内向性を強めていく．少女の眼を外に向けさせる転機が訪れれば，そこそこの芸術家になるかもしれない．

図版15．緩やかに曲がったなだらかな起伏のある道路．道路脇の小さな池に少年と彼のオートバイがある．他には誰もいない．行くあてはない．先にも同じ様な道が続いている．進もうか戻ろうかと考えているが，そのうちそんなことは重要ではないと思い始める．いろいろなことを思いだそうとするが，感情を表す断片的な言葉が浮かんでくるだけ．そのうち空想するには自分のベッドの方がいいと思い，もと来た道を家へと向かう．

[まとめ]

ＭＫの同一性地位はモラトリアムであるが，これはＭＫがかなり立ち直って来た頃に面接が実施されたからであろう．職業的には見通しは立っていないが，「生甲斐のあることに打ち込みたい」とはっきり述べている．ＮＨの「組織に組み込まれるのはいや」という言葉も，自分の独自性を強く求めている点でＭＫと類似していると言える．

Cl群，M-Cl群のＴＡＴ物語は，戸川(1953)のいう図版，物語の両特性をうまく取り込んだものでありながら，かつ語り手自身の特性もある程度投影されたものであった．そして，これらの両群においてはその特性は，状況に対する独特の見方となって現れていた．この点に関するＭＫのＴＡＴ特徴は図版15に集約されていると言ってよい．この図版で強調されるのは，なんと言っても姉の持つ「心の灯り」である．この「心の灯り」はまさしくＭＫの心の奥底にあって彼女を支えているＭＫ自身のオリジナルなものであり，ＭＫに独特のものである．このような特徴はＮＨの図版１，６にも見られる．図版１の主人公は「夕暮れ時の誰もいなくなった校舎の雰囲気が気に入り」，棚の中の変わった装置をいじるのに夢中になって家に帰るのを忘れている．また，図版６の「自分の好きなこと」にかけてみようとする少女も，同様の特徴，すなわち何事にも自己主張をしようとする傾向を反映していると言えそうである．このような傾向はM-Cl群のＴＭ，ＩＫらにおいても共通していた．

この他に，ＭＫの「当たったか当たらなかったかは分からない」（図版１）とか「死ぬのも滑稽なので出て行く」(8)という表現や，ＮＨの「そのうちそん

なことは重要ではないと思い始める」(15)といった表現は，つきつめた状況に一歩距離を置こうとする態度の現れとも考えられる．しかし，同時に，MKの「心の火のようなものを見ることによって生きている」(15)とかNHの「少女の眼を外に向けさせる転機が訪れれば，そこそこの芸術家になるかもしれない」(1)という表現に見られるような，現実への接触の態度がうかがわれることも注目される．

MKの自叙伝で特徴的なことは，基本的にN群のHIと同様に各発達段階で様々な問題に直面しつつ，そのいずれにおいてもうまく対処することができずに挫折していることである．但し，休学中の一年間はMKが社会的な適応力をつけるのに充分な期間であったようだ．しかも，そこでMKはただ単に力をつけたのではなく，自己の矛盾を洞察することによって自分の問題を構造的に把握している．

□P-Cl群　IT　4年生　男子

◎地位面接

[同一性地位] 同一性達成

[将来の職業] 就職内定済み（流通関係）．但し，自分の力を発揮できるやり甲斐のある仕事なら変える．

[価値観] やる気・興味が大事．以前は一生の目標を追求することが大事だと思っていたが自分には無理だと思った．

◎TAT要約

図版3．都会の夫に嫁いだ女の人が実家に帰って来た．二人の農夫とは友達で一話した．実家へ帰ると言っても挨拶程度．変わってない風景を冷静に追っている．

図版7．家族揃って遊園地に遊びに来た．子供がブランコに乗りたいというので母親が諭す．父親はブランコが空いたらブランコに乗って遊ぼうかと思い，そうする．

図版15．喫茶店の風景．男が友達のA子とコーヒーを飲みながら話している．友達のB夫を見かけた男が手を振り，気づいたB夫は喫茶店に入ってきて3人で遊びに行く．

◎自叙伝要約

小学校では気弱な優等生，中学校ではいたずら者，高校では真面目な学級委員と性格は変化してきた．家庭は円満だった．高校時代のある友人に影響を受けた．二人で人生観・世界観について口論したりし，人生をしつこく考え，いかにいきるべきかと考えた．大学では期待が大きかった割には授業が味気なく，1年のときは本とパチンコ．2年からは行く気も失せた．休学中に家業の手伝いをし，その間に実生活に触れ，働くことの喜びを味わった．高校時代の担任の先生の話に眼の前が開かれる思いがし，清濁併せのむ自分が認められるようになった．以前のような気負いはなくなり，自分に合った職業を選ぶことができた．

[まとめ]

地位面接では職業・価値観共に過去に危機の時期を経ており，休学経験を通じてそれらを修正・再選択している．但し，職業については将来の変化の可能性を示唆しており，それほど強く傾倒しているわけではなく，価値観についても妥協が見られる．

TATでは主人公に対する目立った働きかけや圧力はなく，情緒的ニュアンスも薄い．そうした状況の中で主人公の欲求もあまり明確ではなく，物語は淡々と進行する．対人関係は表面的かつ形式的で実感はこめられておらず，周囲に対してある程度の距離をおいてかかわっている．個人内部において固有の世界を保ちつつ，自己に対しても外界に対しても一定の距離をおいて表面的にかかわっている．

Cl群，M-Cl群のような顕著な特徴はなく，むしろN群とほとんど変わらない自由なかかわり方が見られる．但し，N群の被検者に見られたような実感の込められ方はなく，個人内部において固有の態度を保ちつつ，状況にある程度距離をおいたクールな態度が特徴的であると言える．

自叙伝はほとんど現在の自分とのかかわりの中で述べられている．高校時代の葛藤，大学入学時の失望と無気力，そして休学中の経験による内的洞察などが現在の自分に向けて収斂していると言える．

総合考察

スチューデント・アパシーの学生についてTATを中心としたテスト・バッテリーを用いて，その他の学生と比較検討した．その結果，Cl群，M-Cl群のアパシー学生のTATは物語の構造においては一般学生のそれと大きく異なる所はないのであるが，その内容はこれらの学生に特有とみられる見方で語られていた．これは，典型例とされたMK，NHの他，その他の諸例においても何らかの形で現れていた．このような特徴は，アパシー学生の主観的な無気力の根底にある「自分とは何か」「自分らしいものが欲しい」という問いかけ，訴えに深く関わっているのではないかと考えられる．例えば，Cl群の典型例として挙げたNHは地位面接で「いろいろなものを自分のやり方で勉強したい」「組織に組み込まれるのはいや」というように，自分だけの独自性を求めているが，そう言うNH自身，TATにおいて孤独に親しみを感じている．同じくMKも，地位面接で

「エノート・コースはいや」「生甲斐のあることに打ち込みたい」と述べているが，そのMKもＴＡＴでは同時に「『心の灯り』をもって生きていく」という物語を構成しているのである．このような点から，ＴＡＴに現れている「状況に対する独特の見方」が「自分とは何か」「自分らしいものが欲しい」という彼らの悩みと少なからぬ関係を持っているのではないか，と考えることができる．

また，ここで表現された彼らの内的世界は検査者にとって非常に人間味のあるぬくもりを感じさせるものであったが，無気力・無感動なアパシー学生にこのような内的世界が潜在しており，さらにそれがＴＡＴというテスト場面において表現されたということは注目に値すると思われる．すなわち，現実の社会生活においては不適応状態にある彼らではあるが，ＴＡＴという一つの限られた枠組みの中において，さらに検査者との一対一の面接場面で，このような表現をとることによって自らを表しているわけである．このことは，普段の面接場面で関係を持ちにくいかれらでも，一定の場面においてはうまく自己を表現することが可能であるということを物語っていると言える．

ところで，このような，自分に固有なものを求める特徴は笠原（1977）が述べている「やさしさ志向」に類似している．「やさしさ志向」とは，アパシー学生が，もし実社会に入るとしたら「手造りの，自分の手の届く範囲の，手ごたえのある仕事」をしたいと言う傾向のことを指し，笠原は二年留学の後，辺境の中学教師を選んだ工学部学生の例を挙げている．

アパシー学生のＴＡＴにおけるもう一つの特徴は，つきつめた状況から身を引き，状況にある程度の距離を置こうとしつつ，同時に，状況に対して漠然とではあるが何らかのかたちでかかわりを持とうとしていることである．例えば，MKの「当たったか当たらなかったかは分からない」とかNHの「そんなことは重要ではないと思い始める」という表現は，所与の課題事態からの一種の逃避とも解釈されるが，「心の火・・・」とか「少女の眼・・・」という表現は社会へのかかわりの保持をも示唆している．笠原（1978）はスチューデント・アパシーにおける部分的な退却が，本人を葛藤との対決から逃れさせ著しい退行からまぬがれさせると述べているが，上記の例に見られるような，単に退却するのではなく退却しつつ社会とのかかわりを志向するという傾向が，また彼らを個性的に社会で再起させるために有効な役割を果たすのではないか考えられる．

最後に，アパシー状態を乗り越えたと考えられるP-Cl群の例から，アパシーからの立ち直りについて考えてみたい．

一般にアパシー学生の予後としては，挫折体験を克服しての独自の立ち直りの他，いわゆるドロップ・アウトや現実との妥協等が考えられるが，この中で，本研究におけるＩＴは一応立ち直った例と考えられる．そのＩＴの立ち直りを促したのは一年間の休学経験である．しかし，ＩＴのＴＡＴ物語はＮ群のそれに比べて，状況に距離をおいた表面的なかかわり方が見られる．また，地位面接でも職業，価値観のいずれにおいても自我関与の程度はそれほど強くはない．以上の点から判断して，このＩＴの場合は独自性を生かしての完全な立ち直りと言うよりは半ば妥協によるものと言えそうである．とにもかくにもP-Cl群はＩＴ一例しかいないので断定的なことは言えないが，アパシーからの立ち直りの困難さがうかがわれる．

尚，62年９月現在，ＨＩは公務員として福祉関係の仕事に従事．MKは来春卒業予定で，中堅企業に就職内定済み．ＮＨは大学中退後専攻を変えて，他大学に編入．ＩＴは大学卒業後入社した会社に勤続している．

要　約

従来，スチューデント・アパシーについての精神医学的見地からの研究は比較的豊富であるが，その意識的・体験的側面に焦点をあてて行われた研究は少ない．そこで，アパシー学生についてＴＡＴを中心としたテスト・バッテリーを用いて，Ｎ群，Cl群，P-Cl群の学生を比較検討した．各群の典型例について詳細に吟味した結果，ＴＡＴからCl群，M-Cl群の約半数のアパシー学生の内的体験世界において，孤独な状況に対する独特の見方が存在することが明らかになった．このような特徴は，アパシー学生の主観的な無気力の根底にある自己の存在についての問いかけに密接に関わっていると考えられた．また，アパシー学生との関係において，ＴＡＴのような枠組みをもって個人的に関わることによって，彼らの内的世界が豊かに表現され接触が促進されることが指摘された．

引　用　文　献

Ackerman, N, W. The Psychodynamics of Family Life. 1958.

Farnsworth, D. L. Mental Health Programs in Colleges. American Handbook of Psychiatry 2 (2), 773-785, 1973.

星野命　青年の異文化体験とナショナル・アイデンティティ　自叙伝と手記による考察　青年心理学研究会（編）　現代青年の心理　福村出版 11-15, 1983.
笠原嘉　大学生に見られる特有の「無気力」について　全国大学保健管理協会会誌 7, 1971.
笠原嘉　青年期―精神病理学から　中央公論社 1977.
笠原嘉　退却精神症　withdrawal neurosis という新カテゴリーの提唱　中井久夫・山中康裕（編）思春期の精神病理と治療　岩崎学術出版　1978.
笠原嘉・成田善弘　Apathy Syndrome をめぐって　精神医学　21(6), 585-591, 1979.
Marcia, J. E. Development and varidation of ego identity status. *J. Personal. Soc. Psychol.* **3**, 551-558, 1966.
丸井文男　留年学生に対する対策　厚生補導　22, 1968.
無藤清子　「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性　教育心理学研究　**20**, 250-256, 1979.
嶋崎素吉・竹内龍男　第 2 回大学精神衛生研究会議報告書1981.
戸川行男　絵画統覚検査解説　金子書房　1953.
山田和夫　アパシーと父性　季刊精神療法　**10** (2), 45-50 (149-154), 1984.
山本和郎　ＴＡＴ―かかわり分析法―　異常心理学講座 2　みすず書房1965.
Walter, P. A. Student Apathy. Emotional Problems of the Student. New York : Blaine G. B. & McArthur C. C. ed. Appelton Century Crafts, 1961.

注１：スクリーニング・テストの質問項目は，アパシー学生についての従来の事例報告から，無気力の主観的様相（抑鬱気分等），無気力の客観的様相（欠席状況等），性格特徴，価値観の 4 項目について各々 6 質問文を適用して作成し，学生相談の有経験者による妥当性の検討を受けた．具体的な質問文は，「最近，本当に楽しいと思ったことはない」「授業にはよくでている」「几帳面なたちだ」「人生の意味を考えることがよくある」などである．

注２：危機の有無と傾倒の程度という 2 つの基準による自我同一性の達成度の測定法．危機とはその人にとって意味のあるいくつかの可能性について迷い，決定しようと苦闘していた時期のことであり，傾倒とは自分自身の信念を明確に表現したり，それに基づいて行動したりすることを指す．この両基準に職業，価値観，政治の 3 つの下位領域が設けられ，この 3 領域の各々の同一性地位の評定を行った後，これらを統合して全体的な同一性地位を評定される．具体的には，2 つの基準の組み合せにより自我同一性の課題への 4 つの対処の仕方を区別し，それぞれ同一性達成，モラトリアム，早期完了，同一性拡散とされる．また，ある地位から他の地位への移行過程にあるとみなしうる場合などには「副評定」が添えられる（詳しくは Marcia, 1966 を参照されたい）．

（付記）
本研究を行なうにあたって調査に御協力いただいた松原達哉先生，嶋崎素吉先生，飯田昌子先生ならびに山口登志子先生に心から感謝いたします．